

2004年度渥美奨学生のページ 「自己紹介」

- アンポン、ベリル ニヤメチェ 「日本への楽しい冒険」-----
- チン、アンジェリーナ 「日本留学を決めた理由と博士号取得後の進路希望」-----
- 李 濟宇 「日本への留学とその後」-----
- 李 承英 「切れない日本語との縁」-----
- 孟 子敏 「大きな世界の中にいる小さい私」-----
- ムラギルディン・リシャット 「建築を通して行う異文化交流」-----
- ナポレオン 「来日の目的」-----
- シュミグロー・オリガ 「日本を知る機会」-----
- ゾンターク・ミラ 「本当の日本との出会い」-----
- 蔡 英欣 「法学者になる道へ」-----
- 梁 明玉 「異文化の理解を深める」-----
- 叶 盛 「日本に留学している私」-----

日本への楽しい冒険

アンボン ベルリ ニャメチェ
Ampong, Beryl Nyamekye

出身国：ガーナ

在籍大学：東京医科大学医学研究科（薬理学）

博士論文テーマ：ジスフェルリンの研究



私は1967年にガーナのクマシ市に、三人兄妹の長女として生まれたベルリ ニャメチェ アンボンです。小さい頃から、いろいろ学ぶことが好きですが、勉強以外の時間は映画をみたり、音楽を聞いたり、本を読んだりしています。高校生のころ、疾病の治療および予防する医薬品に対して非常に興味を持ちました。そこで高校卒業後、ガーナの科学技術大学の薬剤学部に入學し、4年間微生物学、製薬学、薬理学、生薬学などの勉強をしました。4年生の時には、一番好きな薬理学を専攻し、卒業研究では、血圧上昇に及ぼすニーム木と呼ばれる人気の漢方薬の影響について検討しました。

1992年に大学を卒業後、一年間薬剤師のインターンとして病院で働き、薬剤師登録試験に合格後、薬剤師として仕事を始めました。ちょうどその頃、「おしん」という人気の日本ドラマが、テレビで放送されました。このドラマには大変感動し、特に日本の文化にはとても興味を持ちました。また、先進国への急速な成長に大変驚き、「日本でもっといろいろなことを学びたい」と思って、日本への留学を決めました。

1997年、文部科学省の国費外国人留学生に選ばれて日本に来ました。その年、ガーナにはない初めての冬を経験し、非常に寒かったのですが、それより一番大変だったのは、日本語がわからなくて困ったことがたくさんあったことです。日本語を初めて勉強したのは一橋大学の留学生センターでした。他の国の言語を学ぶことは、大切なことだと思います。なぜならその国の人たちとコミュニケーションができるし、その国の文化から多くのものを学びとることもできるからです。日本語を勉強後、東京薬

科大学 薬理学教室で甲状腺機能低下症に関する研究を行いました。医学的立場から病態について研究をしていきたくかったので、東京薬科大学を卒業後、東京医科大学大学院 薬理学専攻博士過程に入學し、現在はタンパク質と遺伝子性疾患との関係に興味があって、国立精神・神経センター 神経研究所の遺伝子疾患治療研究部で、筋ジストロフィーの分子病態を研究しています。

近年、分子生物学および分子遺伝学の発展、研究技術の進歩は、遺伝子性疾患の治療進歩のためにとっても重要な役割を果たしていると思います。これまで日本で学んだ経験は、将来非常に役に立つと思います。卒業後は、ガーナにある科学研究所で研究する予定ですが、そこでは、日本で行った研究だけでなく、日本の文化のよい点も伝え、ガーナの医療の発展に貢献したいと思っています。

日本留学を決めた理由と博士号取得後の進路希望

チン アンジェリーナ ヤンヤン
Chin, Angelina Yanyan

出身国：アメリカ

在籍大学：お茶の水女子大学ジェンダー研究センター（ジェンダー研究）

博士論文テーマ：1920～30年代の中国南部の都市における女性労働者、セクシャリティーと人の移動



私は博士論文を2005年の春に提出する予定です。私の研究は、中国人の女性移民を事例に、1920～30年代の近代都市に出現した女性による新しい労働のあり方を、当時のサービス産業の形成との関連で考察し、これを国際的な近代化という現象として分析するとともに、この過程の一部を構成する人の移動とジェンダー関係を検討することを目的としています。

博士号取得後は、アメリカの大学で東アジアの歴史を教えたいと考えています。アメリカの大学では、通常歴史学部の教員は地域の専攻に分かれるため、各校にアジアの歴史の担当教員が一人しかいない場合が多いです。したがって教員は専攻が中国史でも、日本の歴史を教える必要があり、その知識を身につけなければなりません。TA(ティーチングアシスタント)としての経験から見ても、アメリカの学部生達のアジアに対する認識は一般的にとっても浅薄だと感じます。しかし、現在のグローバル化した世界において、他国の思想と文化が理解できなければ、誤解や文化摩擦が起こる恐れがあります。それは、現在の世界平和を脅かす原因の一つだと考えます。私は、自分が大学教員になった時に、日本の歴史と文化に関する正確な知識を学生に与えられるようになりたいと考えます。現在、日本語や大衆文化などを学びながら、日本社会に対する認識を深めています。貴奨学金を受けることができたら、さらに日本語の能力を磨き、教員にふさわしい日本文化や歴史に関する知識を蓄えたいと思います。

また、知識の交換と普及は国という境界に縛られません。東京は世界の中でも、中国の近代史研究の優

秀な研究者が集まっている地域の一つです。特に私の研究テーマのような中国人の女性史に関しては、日本の学者は先駆者であります。残念ながら、英語圏の学者はこれまで、環境の差異と言語の壁があり、日本の学者との学术交流が困難な状況にありました。日本で研究を進めていくことができれば、今後、学会や翻訳、出版などの国際学术交流活動に貢献できると思います。特に、現在所属しているお茶の水女子大学のジェンダー研究センターは、多くの学問分野にまたがる国際的な研究所です。そこで多様な研究者と交流することによって、専門（歴史、中国研究）以外の研究方法と視点を参考にすることができると思います。

博士論文を提出した後は、単行本として日本語、英語、中国語などの多言語で出版することにより、国際的なネットワークの発展に参加し、貢献したいと考えています。

日本への留学とその後

李 済宇

出身国：韓国

在籍大学：早稲田大学理工学研究科（建設工学）

博士論文テーマ：地表地震断層に対する社会基盤の防災性向上に関する研究



1994年に大学院修士課程を修了し、日本に留学するまでの約8年間は、建設会社の土木設計および研究開発分野で実務を経験しました。常に前向きな姿勢で仕事に取り組み、技術士の資格なども取得しましたが、その過程で、韓国では未だ技術開発が進んでない地震時の構造物被害及び防災対策という分野に興味を持つようになりました。韓国は国土の7割以上を山地が占めるうえに人口密度も高く、多くの点で日本と似ていると思いますので、人間が住む環境を作る土木事業は、日本のそれと密接な繋がりがあるのは間違いないだろうと言えます。私は2000年の春から1年半にかけて、長大トンネルにおける新たなライニングの適用性を検討しましたが、その際に提起された耐震性能の問題を解決するために日本の技術者を訪ねたことが、日本への第一歩となりました。その後、トンネルから地震というところに自分の狙いが変わっていきました。母国では地震による被害事例が少ないとはいわれますが、グローバル化している建設市場に技術者の一人として参加する為には、この分野で最も技術力が認められている日本で学業と研究を重ねることにより、より高い防災対策技術を習得することが大事だと思い、日本への留学を決意しました。

現在、母国の産業は成長段階から安定期に入りましたが、今後私の研究している分野が大変重要になることは間違いなく、日本で培った私の経験と知識が重要なベースになると信じております。

博士課程に入学してからの2年間は瞬く間に過ぎていきましたが、まず正規課程以内に工学博士の学位を取得し、課程修了後は韓国に戻って日本で積み

重ねた学術知識と研究に取り組む姿勢をもとに、建設会社又は建設関連技術研究所において、主要施設の防災及び保守の分野の中堅技術者として勤務するつもりであります。それに加え、私は母国の建設会社において土木設計および研究開発分野で約8年間の実務経験がありますので、母国の建設業界で発生する難題の解決に大きく寄与出来ると自負しております。また、機会が与えられるものであれば、母国ではまだ手付かず分野である自然災害に対する社会基盤施設の防災に関わる後進養成の為、大学の教壇にも立てればと思います。

私の所属する研究室は、甚大な地震被害に日米間共同で対応することによって被害を最小化する対策を立てる為に、現在アメリカのコーネル大学やカリフォルニア大学と学术交流や共同研究を活発に行っております。私はそのプログラムの一つとして博士号取得後、アメリカでさらに研究を重ね、韓国だけではなく日本あるいはアメリカでも、地震災害を含めた防災の分野で土木技術者として活躍したいという夢も持っております。

私の研究している分野は、自然との闘いが多い土木工学分野の中でも特に重要な課題である、「世界の何処でも人間が安全に生きていける」環境を作ることであり、ここで自分の力を生かせるよう、これからも更に努力していきます。

切れない日本語との縁

イ スンヨン
李 承英

出身国：韓国

在籍大学：筑波大学文芸・言語研究科（応用言語学）

博士論文テーマ：室町時代における漢字音研究 抄物の『玉塵抄』を中心として



私は高校生の時、韓国と政治や文化などで密接に結びついている隣国の日本に興味を感じ、韓国の大邱にある慶北大学の日本語学科に入学しましたが、以後もずっと、日本語や日本文化への関心はそのまま続いています。

大学3年の時、大学生親善訪問団の一員として水戸市に10日間滞在したことがあり、水戸市をはじめとして茨城県や東京都などの名所や国の機関などを見学させてもらったり、当時筑波大学で研修中だった韓国の大学院の指導教官に筑波大学やつくば市を案内してもらったりしました。日本の一般の家庭で3日間ホームステイを経験することもできました。そのようなことを経験している内に、韓国で日本語や日本文学などを学んでいるうちに、あまりにも日本語や日本の社会、日本の文化などに知識が浅いことに気づかされました。それとともに、その研修の経験を通して私は、日本をもっとよく知り、そしてそれを他の人に正しく知らせるのが日本語を専攻している私の役目でないかと思い始めました。

その後、日本語の研究をして日本語のことをもっとよく知ってから日本語教師となるかと考えて、大学院に進学しました。大学院で最も関心を持ったのは韓国語と日本語の対照研究でした。「日・韓授受表現の対照研究」というテーマで修士論文を書いている内に、日本語の研究を韓国で行うことの限界を感じました。言語研究は、まずその言語を使っている社会、その言語を作り育て、そしてその言語によって成り立っている文化をよく知らなくてはどのような、としみじみと感じ、日本語研究の「本場」である日本で研究してみたいという気持ちが募ってきました。幸いなことに、指導教官も筑波大学の文芸・言語研究科の出身で、筑波大学の文芸・言語研究科を積極的に勧めてくださり、念願の留学がかないました。

そのおかげで、今現在は諸先生方の授業やゼミに

出席し、歴史的な文献の講読や音声・音韻論、現代文法から対照研究まで多様な言語学的な知識を身につけながら、文化史的観点を交えて「室町期抄物における漢字音研究」というテーマで、来年博士号を取ることを目標とし研究に励んでおります。

博士号の取得後は、帰国して母国の大学の教員となって、日本語教育、日本語学教育に携わりたいと思っております。日本で得た日本文化に関する知識や日本での留學生活の経験などを十分活かし、日本を正しく伝えること、それが前々から抱いている私の個人的な望みでありますし、お世話になった韓国と日本の先生方の希望でもあります。また、そうすることこそ、私を育ててくれた韓国と私の研究を支えてくれた日本に対するささやかな恩返しだと思っております。

実際の教育の場では、これまで韓国でなされてきた日本語教育の実践と実績の上に日本で学んだ新しい日本語研究の成果を加えて、授業や研究指導に工夫をし、努力したいと考えております。韓国は、世界でも上位を占めるほど日本語教育や日本語研究が盛んに行われておりますが、その専門分野は余りにも文法に偏っております。

日本語や日本をより深く理解できる人材を育てるためには、より幅広く日本語の各側面や、日本語を取り巻く文化と日本語の関係などについても研究していく必要があると思われます。私は、生涯をかけてこの分野を切り開き、その教育に携わっていきたいと思っております。

私個人の出来ることには限界がありますが、日韓の大学を柱として、人と人との接触を第一として、日本語研究、日本語教育を通して日本を韓国へ紹介することを中心としながらも韓国文化を日本に伝え、そうして日韓友好親善の一つの架け橋となること、それが私の帰国後なすべきことだと考えております。

大きな世界の中にいる小さい私

もう しびん
孟 子敏

出身国：中国

在籍大学：筑波大学大学院文芸・言語研究科（言語学）

博士論文テーマ：『金瓶梅詞話』の言語学的研究



私は孟子敏と申します。現在、筑波大学大学院文芸・言語研究科で勉強していて、専攻は言語学です。初めて日本に来たのは1999年3月27日のことで、外国人特別講師として、中国語及び中国文化を担当しました。その後、研究を続けるために、任期を終えてから、筑波大学に留学することを決めました。

現在、世界はグローバル化が進んでいますが、どの国でも、常に「X国へ行こう」という人をひきつけることばが聞こえてきます。どの国へ行くかは、その人の背景や知識や経験によって異なってくると思います。私が日本留学を選択したのは、なぜでしょうか。

まず、職業の経験が私に日本への留学を選ばせたといえます。北京にいた時、私は外国からの留学生を対象に、異文化交流の教育・研究を行っていましたが、私が教えた学生は、アジア・ヨーロッパ・アメリカ・アメリカ大陸の計80余りの国家に及び、計5000名余りに上っていました。ある日、私はある日本人留学生に「なぜ中国へ留学に来たのですか」と聞きました。その留学生は「中国からの留学生たちとの異文化交流がうまくできるようになるために来ました。」と答えました。その時、私は驚きと不安を感じました。異文化交流の教育者・研究者として、毎日、日本人留学生と接触していますが、日本社会での体験は皆無で、私が知っている日本文化は結局は皮相なものではないかと感じたのです。このことがきっかけで、日本へ留学する道を選ぶこととなりました。

また、私は学術面で、『金瓶梅詞話』の研究に従事していて、その版本は主に3つありますが、その内2つは日本にあるのです。日光山輪王寺慈眼堂本及

び徳山毛利家棲息堂本です。中国では、『金瓶梅詞話』に関する資料収集や学術研究はいずれも非常に困難であり、日本ほどこの方面の研究が行いやすい地域は他にないと思います。したがって、もし日本で研究が行えない場合は一生涯悔やむこととなります。

現在私は、研究を進めるとともに、日中交歓会・平和講座などさまざまな交流活動に参加しています。その結果、日本の文化、習慣などがいろいろ分かってきました。ちなみに、今年の9月から、私は中国の経済特区深圳で出版されている『深圳週刊』に「海外文化」というコラムを書き、日本の生活、文化、習慣、人物などを中国人に伝えるように努めています。

博士号取得後、帰国し、北京で、大学及び大学院に就職して、中国の学生及び各国からの留学生を対象とする異文化交流の教育・研究に従事したいと考えています。

私が渥美奨学生を応募した理由は、研究を維持するために、奨学金が必要だというだけではなく、もう一つの夢をも実現するためでもあるのです。その夢とは、国際理解や親善や信頼を促進し、世界の調和的発展を求めることです。小さい私は大きな世界の中において、大きな世界は小さい私の心にあって、いつまでも、この夢の実現に努めて行こうと思いません。

建築を通して行う異文化交流

ムラギルディン リシャット
Mullagildin, Rishat

出身国：ロシア

在籍大学：慶応義塾大学政策メディア研究科（環境デザイン）

博士論文テーマ：シベリア鉄道開発が新都市開発に与えた影響に関する研究



私が日本に興味を抱き始めたのはソビエト時代だった。特に当時ロシアでは禁止されていた空手に興味をもち、それを知りたいという気持ちから、芥川龍之介の翻訳本や黒澤明の映画、芭蕉の俳句などから日本についての想像を膨らましていた。

将来の目標を建築家に決め、モスクワ建築大学入学試験を受験した1980年半ば、日本の現代建築は世界的にもユニークな思考性と高品質な施工技術が話題となっており、雑誌などで紹介される作品は、私の建築への夢を膨らませた。当時ロシアは建築の停滞期であったが、そのような状況下のロシアにおいても、創造性を鋭く紙上で表現した「ペーパーアーキテクト」と呼ばれる建築家たちの作品が日本開催の国際設計競技で幾度も入賞を果たし、建築雑誌によって世界に紹介された。世界の建築をリードする日本のコンペは創造のチャンスと夢を与えてくれた。私も日本の設計競技で2回入賞を果たしたことは大きな自信となっている。

1993年に、1ヵ月間の大学の交換授業によって来日し、初めて日本の現代建築を目にした。その時、日本には世界に先駆けた技術や思考があり、学ぶべきことが非常に多いと感じ、日本で設計や研究活動を行いたいとの気持ちが芽生えた。大学在籍時より建築事務所での実務経験を積み、大学卒業後はモスクワでクレムリン大改修プロジェクトに参加した。その後、交換授業でお世話になった芝浦工業大学から招聘を受け一年間留学した。日本の建築設計の現場を知りたいと思い、研修生としてゼネコンの設計部において主にコンペに参加した。

その後、都市計画の専門的な研究を進めるため、世界レベルの研究環境が整っている慶応義塾大学政

策メディア研究科に移り、研究テーマを19世紀-20世紀初頭のシベリア鉄道開発都市計画史と決めた。本研究は歴史研究に留まらず、将来の開発計画のためのデータベースとして、この地域のもつポテンシャルを証拠付ける資料として役立てたいと考えている。シベリア、極東地域は隣国による様々な利権が絡んでいるが、ロシアが、土木、建設の分野で先進的な技術や世界での指導経験を多くもつ日本をパートナーとして協力を得る可能性は大きいと思う。また21世紀に深刻なエネルギー問題の解決のために日露の関係はより深くなると思う。私の研究を日本の専門家の意見を聞きながらまとめるのは、非常に重要なことと考えている。博士号取得後は都市開発の分野において、ロシアと日本の相互の状況を把握した唯一の専門家としての活動を開始し、日露プロジェクトの提案、推進そして具体的に計画を進めたい。

最後に昨年執筆した『ロシア建築案内』について記したい。広大なロシアの建築文化を1冊にまとめたこの本は日本のみならず、国際建築アカデミーにおいて大変高い評価を受けた。母国の文化を正しく伝えることへの使命を感じながら書いた執筆作業は外国に身を置くことによって、母国にいた時以上に、自国の文化を振り返ることができた仕事であった。

来日の目的

ナポレオン
Napoleon

出身国：インドネシア

在籍大学：東京工業大学理工学研究科（機械制御システム）

博士論文テーマ：人間型ロボットのバランス制御に関する研究



私はインドネシア出身で、高校を卒業するまでにスマトラ島のペカンバルという町に住んでから、ジャワ島にあるバンドン工科大学に進学しました。バンドン工科大学で一年間ぐらい勉強してから、日本へ留学をするチャンスを得て、9年前に来日することになりました。そして、6ヶ月間ほど国際学友会日本語学校で日本語を勉強してから、沼津工業高等専門学校に入学し、その後東京工業大学に編入学し、現在の博士課程に至ります。

日本は制御とロボットに関する技術において進んでいる国であり、実際に毎日の生活では制御とロボットの技術が多く適用されています。さらに、生産過程においても制御とロボットが欠かせないものであり、効率よく製品の製造を行っています。これに対して、私の国であるインドネシアでは制御とロボットに関する技術はあまり使われていません。その一つの原因としては制御とロボットに関する分野を学んだ技術者がまだ少ないためであると考えられます。従って、私はこの分野に関して先進国である日本で制御とロボットの技術について勉強することを決意しました。いろいろな面からロボットの制御に関して学んできて、実際に計算機を用いたロボットの制御も行ってきました。これにより、制御やロボットの技術における理論の習得とその実装を身に付けることができました。

将来的にはインドネシアに戻り、日本で得られた知識をできるだけ自分の国の発展に貢献できるように頑張っていきたいと思っています。制御やロボットの技術を自分の国にも普及させたいと考えています。これを実現するために、私は自動化やロボット技術を開発する会社を設立したいと考えています。

しかし、実際に会社を設立するには、様々な経験や膨大なお金が必要になりますので、現在の博士課程を修了後は、多くの経験や実用的な技術を取得するために数年間程度日本の大学または会社で働いて、様々な実用的な知識を深めてからインドネシアに戻りたいと思っています。

さらに、インドネシアに戻ってからでも会社での研究開発を行うだけではなく、インドネシアの大学の非常勤講師として制御やロボットの技術を学生らに教えたいと考えています。そして研究開発を行いながら、制御やロボットの技術などについて日本の大学や会社との交流や共同研究なども行っていきたいと思っています。

日本を知る機会

シュミグロー オリガ
Shmyglo, Olga

出身国：ウクライナ

在学大学：東京大学総合文化研究科（地域文化研究）

博士論文テーマ：戦後日本の商品広告にみる女性の表象
女であること・結婚・家庭



私はキエフ国立大学の日本語と日本文学学科を卒業してからウクライナ外務省に就職しました。日本のウクライナ大使館で働いた時期もあります。特に職場で要求されたわけではありませんが、日本のことをもっと深く知りたいと思い、外務省を退職し、キエフ大学の大学院に入学しました。しかし、ウクライナには日本関係の資料が少なく、日本で勉強したいと切望しておりました。幸い文部科学省の奨学金試験に合格し、東京大学に入学しました。

まず、日本の文化や社会を理解するために、根本的な（基本的な）勉強から入った方が良いと思い、福沢諭吉の道徳形成論を中心に、日本の政治思想史の勉強をしました。独立したばかりのウクライナにとって、明治維新頃の日本に、多くの共通点を見出すことができ、大変良い勉強をしたと思います。

現代日本の根本的な部分を研究した後、広告は、日本社会、人々の現実的な考え方、理想を写す鏡ではないかと考え、広告と社会の関係の勉強をしようと思いました。昔啓蒙家が果たした役割を、現在は広告が担っている。大活躍をしている多くの女性を排出した下地には、広告によって作り出された世界観、理想像があります。そこで、「戦後日本の商品広告にみる女性の表象 女であること・結婚・家庭」というテーマを研究することにしました。変化が激しかった戦後30年の間にその発展段階において、広告は女性にどのようなメッセージを送ったのか、どのように女性像を描いていたのでしょうか。

「知」と「道徳」が大変重要であるとする福沢諭吉は、又実学をも重んじています。福沢諭吉と広告の研究は一見関連性がないようにみえますが、広告

の変遷を分析することにより、日本社会の発展の道をたどることができるのです。広告の歴史から見えてくる日本の実社会を研究することは、資本主義に変わったばかりのウクライナの社会に、これから訪れるであろう様々な問題点を解決する上で多くの示唆を与えてくれると確信しています。

博士号を獲得できたら、国際交流、ウクライナと日本の総合理解を深めるための仕事をしたいと考えています。

本当の日本との出会い

ソントーク ミラ
Sonntag, Mira

出身国：ドイツ

在籍大学：東京大学人文社会系研究科（宗教史学）

博士論文テーマ：大正期日本における合理主義と救済



私は旧東ドイツのツィッカウに生まれた。ベルリン・フンボルト大学に入学する前に、当時政治的に斉一化された寄宿学校で学んだが、19世紀末の学校建設者の教育改革論的な意識の余韻は、まだ感じられた。あるいはそれは、旧東ドイツを解体に導いた社会的危機において、破壊分子として再び注目されるようになった要素であったかもしれない。寄宿学校における共同生活の中で、学生と先生との間では、個人的な会話をする機会も多かったので、授業を通じてばかりでなく、先生との個人的つながりで多くを学んできた。学校は政治的に斉一化されていたにも関わらず、立論における相互理解は重要であるとされていた。予ねてその時から、私は遠い国々、異文化への憧れを抱いて、資本主義的外国への旅行が許されなくても、日本への旅行を夢に待った。

ドイツが再統一された90年には、私は大学入学資格を得たばかりの19歳だった。寄宿学校における共同生活の社会化、教育改革論的な精神、およびドイツ統一前後の転換期の経験があったので、入学後に習得した知識についても、それらの現在における「意義」を探究しないではいられなかった。大学で、私は日本学、神学とロシア語を科目として選び、それぞれの分野において出来るだけ幅広いテーマ、また各分野に渡るテーマに携わるように努力した。修士学位の取得時、すなわち大学時代の終りとなった時、それからこそ真の勉強が始まるような気がして、博士課程に進学することに決めた。

修士課程の途中にすでに来日したことがあったが、その時は、留学生会館の生活および外国人向け特別日本語コースの色彩のある、限られた日本経験しか出来なかったのが、今回の留学では、本当の日本と

一層深く出会おうと思った。そのために、大学の普通の博士課程に入り、隣人との会話を求めながら、日本人ばかりの住宅地に暮らし、娘の世話を区立の保育園にして頂くようにした。娘は、外見が金髪で100パーセントドイツ人なのに、内面的にはある程度日本人でもいるらしい。それで、ドイツと日本との二つの文化は、私の日常生活あるいは家族のアイデンティティとも深く関わるようになった。将来も、人間的な環境において経験を通して理解を得、さらに伝えていくことが出来れば有難いと思う。つまり、隠遁した研究者の暮らしより、むしろ自分が得た認識を教官として学生に伝えたり、学生達と共に新しい認識を得たりしたい。

法学者になる道へ

さい えいきん
蔡 英欣

出身国：台湾

在籍大学：東京大学法学政治学研究科(法学)

博士論文テーマ：種類株式間をめぐる利害調整



私は1971年に台湾・台北市で生まれ、一人娘として育ちました。両親の開放的な教育方針のもとで自由に、自分の目標を追求しながら育ちました。台湾大学法学部を卒業後、同大学院の修士課程に進学し商法の研究をしました。修士課程終了後は、弁護士として主に会社法、証券取引法に関連する問題を取り扱ってきましたが、台湾の急速な経済発展に比較して法制度、特に商法等の経済活動に関する法制度の整備が不十分であり、現実と法制度との矛盾が至るところに生じていることを痛感してきました。そこで、実務経験を生かした上で、海外の大学に留学し、将来法学研究者として台湾の法整備や法解釈の確立に寄与することが、実務家を続けるよりも重要であり、また私にできることであると考え、弁護士を辞め、留学しました。

日本を留学先として選んだ理由は、日本の商法の形成と変容の特色が同じアジアである台湾の商法のそれに非常に似ていることです。つまり、日本の商法は明治時代に継受したドイツ商法を基礎として、戦後アメリカ法の諸制度を導入することによって形成されてきました。台湾でも同様に、戦前の日本商法の基礎の上に戦後アメリカ法を導入して法改正を進めようとしています。従って、日本の商法がドイツとアメリカという異質の法を日本という異質の風土に導入し、どのように日本の社会実態に適合させているかを研究することは、台湾の将来の法整備にとって大きな示唆となると考えたからです。

日本での留学も8年目に入り、現在、博士論文を執筆しております。日常生活においてはドイツ語と英語といった語学の勉強に大変興味をもっており、毎日のように独学しております。これらの外国語を

通じて、自分の専門分野だけではなく文学・美術・クラシック音楽など他分野の世界にも入り込むことができ、自分自身の視野も徐々に広がっていきます。将来、博士号取得後は、台湾に帰国し、台湾の大学において商法の研究と教育に携わりたいと考えています。台湾の法整備と商法学の発展に貢献するのはもちろんですが、日本留学の経験を生かして、研究の視野をアジアにおける法の文化的特色の解明へと拡大できればと考えています。グローバル化の時代における、アジア共通法の樹立が特に経済取引の分野で求められているからです。

異文化の理解を深める

ヤン ミョンオク
梁 明玉

出身国：韓国

在籍大学：お茶の水女子大学人間文化研究科（人間発達科学）

博士論文テーマ：理想的老人像に関する実証的研究 日・韓比較研究を通じて



韓国で大学卒業後、出版社で取材記者として2年余り勤めていたことがあります。取材のため、様々な人と触れ合う機会がありましたが、その中でも非常に印象に残る人物がいました。その人は68歳のカーレーサーの方でした。もちろん職業はカーレーサーではなく、定年後、趣味として始めたそうです。私が驚いたのは、カーレースという趣味を持っている方がいるということではなく、その年になっても生き生きとした趣味活動を送っているということでした。当時（1990年）、70歳の方の生き方としては韓国でも珍しく、話題になっていました。

いずれ韓国でも高齢化社会が到来し、社会福祉や高齢者の生き方など高齢者を取り巻く環境が深刻な社会問題となるという課題に関心を持ち始め、社会福祉や老年心理学という学問についてより深く研究することを望み、高齢化や社会福祉が進んでいる日本への留学を思いました。特に、日本への留学を決めた理由としては、まず、日本は高齢化が進んでいること、社会福祉や年金制度が安定していること、医療が進歩しているという社会状況と、先進国の先例として韓国に應用しようとするとき、欧米や欧北などの国と比べて、日本は同じ東洋圏として生活習慣や文化、価値観などのギャップが小さいというメリットがあったからです。

来日後、お茶の水女子大学での研究生を経て、97年大学院に入り、修士課程では日本の施設高齢者の幸福感について研究し、博士課程では、両国（日韓）の高齢者の対人関係とライフスタイルに関する実証的な研究を行っています。実証的な研究の結果により、日本よりかなり遅れて人口高齢化のプロセスをたどりはじめ、高齢者問題が新たな社会的問題

となっている韓国にとって、日本の経験が先行事例として重要な参考となり、また、比較研究を通じて、同世代を生きていく両国の高齢者のライフスタイルを明らかにするとともに、お互いの文化や価値観などの相互理解をより深めることを期待しております。

日本で積み重ねた研究を博士論文にまとめ、博士号取得後は韓国に戻り、日本での研究経験を生かして、人口高齢化の急激な加速にも関わらず社会福祉がかなり遅れている韓国の現状に貢献できる研究者として活躍することを望んでおります。

日本に留学している私

イェ シェン
叶 盛

出身国：中国

在籍大学：東京大学先端技術研究センター（先端学際工学）

博士論文テーマ：一塩基多型を迅速かつ正確に検出する方法の開発



中国の四川省から来ました私は、武則天が生まれた廣元市で生まれました。日本の科学技術はとても進歩していると思います。また、日本と中国は近く、両国の間には昔から、文化や技術の交流の伝統があります。中国と日本の交流は、物と心の両面で、これからもっと盛んになると思います。それで、私は科学技術を勉強するために、日本へ留学することを決めました。訪問学者として東京大学で研究していた修士指導教官の推薦で、修士卒業と同時に2001年10月に来日しました。1年間現在の研究室で研究生として過ごした後、2002年10月に東京大学の先端学際工学専攻博士課程の入学試験に合格しました。これからの研究の進み具合によっては「本学の例外規定」により期間を短縮し、2年半で博士号を取得することを目指して、日夜精力的に研究に励んでいます。

私は、日本に来て、研究生として直接的に研究室に入って、すぐに新しい研究を始めました。研究テーマは「1塩基多型を迅速かつ正確に検出する方法の開発」です。研究室では私が初めてこの研究を行います。SNPとは人によって遺伝子のある場所に1塩基対のみの違いです。今は世界中でSNPが大いに注目されています。SNPは人のDNAの中に約300万個も存在し、遺伝病の発現や薬物代謝などに大きな影響を及ぼすために、将来のテーラーメイド医療に必要です。迅速かつ簡便なSNPの検出法の開発が全世界的な注目を集めています。これまでも多くの検出法が提案されていますが、どちらも欠点を持っています。私は、DNAの中に危険因子があるかどうか、簡単に判定できる方法の開発を目指してきました。将来は複雑な検査処理が要らな

く、普通の病院での利用が期待できます。今まで私は、肉眼でSNPを正確に検出する手法を開発しました。この方法により、溶液の色を見るだけで、DNAが病気にかかりやすい危険因子を持っているかどうか、色変化により肉眼で一目瞭然に判定できます。従来法と比べても、とても簡便、迅速であり、高価な機械は要りません。本手法はこのような特性を持つので、様々な場所、特に臨床現場でのSNPと変異の検出に有用であると期待しています。

私は日本でたくさんのことを勉強して、博士号を取得してから、中国に帰りたと思っています。そして、日本で学んだ成果を中国の科学技術の進歩に役立てたいと思っています。近い将来科学者として国際学术交流に貢献したいです。卒業後は、中国の大学に就職し、バイオテクノロジー分野の研究を続けたいです。また、日本で勉強した研究方法と考え方を中国の学生に教えるつもりです。さらに、国際親善大使の一員として日中友好と文化学术交流にも貢献したいと望んでいます。